

論文

ポーランド語学習教材としてのポーランド映画 (1) —イェジ・スコリモフスキ監督「アンナと過ごした4日間」を例に—

渡辺 克義

はじめに

日本の外国語教育において英語は特別な地位を占めており、初級から上級に至るまで様々な学習教材が開発されている。これに対して、ポーランド語のような所謂“マイナー言語”では、需給の関係から、市販教材——とくに、中級・上級学習者を対象としたもの——を上梓することは難しい。

映画が上級者のための有効な教材になることはわかりながらも、ポーランド語教育法において研究・開発がこれまで手付かずだったのは、学習人口が極端に少ないことが直接関係している。

本稿は、ポーランド映画がポーランド語上級学者者に有効なツールになることを示そうとする試みである。同時に、取り上げる映画の研究・分析も試みる。

イェジ・スコリモフスキ

イェジ・スコリモフスキ (1938年5月5日¹、ウッチ生まれ) は1960年代のポーランド映画を代表する、いわゆる「第三のポーランド映画」²世代のひとりとして知られる映画監督・脚本家・俳優である (このほかにも、詩人、画家、元アマチュア・ボクサーなどの顔をもつ。その多芸多才ぶりはわが国の北野武と較べることができるだろう)。彼の映画活動歴は、ウッチ映画大学在学中にアンジェイ・ヴァイダ監督の「夜の終りに」(1960)と、ロマン・ポランスキ監督の「水の中のナイフ」(1962)の脚本を共同執筆したことに始まる。スコリモフスキの名声は同世代の若者を扱った自伝的な三部作——「身分証明書」(1964)、「不戦勝」(1965)、「バリエラ」(1966)——を監督したことで不動のものとなった。前二作では主人公のアンジェイ・レシュチツの役をスコリモフスキ自らが演じた。スコリモフスキ映画は1960年代ヨーロッパの所謂「ニュー・シネマ」の流れを汲んでおり、ドキュメンタリー色が強く、即興性を重んじていること、ロング・テイクを多用していることなどが特徴である。「身分証明書」はウッチ映画大学の二回生の時から撮りためた習作を編集した作品で、主人公が大学を辞め、兵役に就くまでの数時間を描写している。「不戦勝」は前作の続編にあたり、ボクシングのわずかな賞金で生計を立てる30歳のレシュチツの物語である。前衛的な映像を用いた「バリエラ」では主役をヤン・ノヴィツキが演じているが、これもスコリモフスキ自身の投影である (スコリモフスキは動画では登場しないが、献血を呼びかけるポスター写真で姿を現している)。四作目となる「手をあげろ！」(1967)はポーランドのスターリン主義時代を扱った、最も早い時期に製作された作品になるが、お蔵入りとなり1985年まで一般公開されることがなかった (プロローグを新たに加えて1981年に一部公開)。「手をあげろ！」は、目が4つあるスターリンのポスターの映像で有名であるが、監督自身はこの映画に政治的な意図はなかったと述べている³。作品では、理想を早々に棄て現実に妥協してしまう中産階級の若者が描写されている。

ポーランド国内での創作が無理と判断したスコリモフスキは、国外で多くの作品——「出発」(1967, ベルギー)、「早春」(1970, 西独・米)、「ザ・シャウト / さまよえる幻響」(1978, 英)、「出稼ぎ労働」(1982, 英)、「成功は最良の報酬」(1984, 英)、「ライトシップ」(1985, 米)、「春の水」(1989, 仏・伊)など——をものした。1991年にはポーランドの作家ヴィトルト・ゴンプロヴィチ原作の「フェルディドゥルケ」(ポーランド・英・仏)を監督した。このほか、他の監督作品に俳優として出ている (ロバート・マン

デル監督「ビッグショット」、1987；ティム・バートン監督「マーズ・アタック！」、1996；ジュリアン・シュナーベル監督「夜になるまえに」、2000；など）。

「アンナと過ごした4日間」梗概

中年男レオン・オクラサは、ポーランドの寂れた地方都市の病院の焼却炉で雑役夫として働いている。彼は私生児で、祖母と粗末な家で暮らしている。レオンは自分よりかなり若い看護師のアンナに片想いをしているが、会話を交わしたこともない。アンナに恋人はいない。トシャ / トシカ（どちらも、アントニナの愛称）という雌猫と暮らしている。レオンは、夜になると双眼鏡で彼女の部屋を覗くのを日課としている。

以前、レオンが川釣りをしていると、驟雨に襲われた。雨宿りのため近くの廃工場に逃げ込むと、アンナが強姦されているのを目にした。恐れおののいたレオンは、釣り道具をその場に残して逃げ出した。彼は容疑者として逮捕される。意志薄弱なレオンは法廷で抗弁することもなく、結果的に有罪の判決を受ける。

祖母が亡くなる。祖母が服用していた睡眠薬を、レオンは、アンナが紅茶を飲む際に入れる砂糖に混ぜ、眠らせ、夜ごと彼女の部屋に忍び込む。しだいに彼の行動は大胆さを増すが、4日目の夜（この夜、アンナは紅茶を飲まずに就寝する）、警察に逮捕される。

作品分析

「アンナと過ごした4日間」 (*Cztery noce z Anną*, 2008) [「4日間」よりは「4夜」のほうが原題および内容に近い] は、17年ぶりのスコリモフスキ監督作品である⁴。「アンナと…」にポーランド的なものを見いだすことはもちろん可能である⁵。社会主義時代の反体制活動家で、現在は『ガゼタ・ヴィボルチャ (選挙新聞)』の編集長を務めているアダム・ミフニクに重い吃音があるのは、幾度となく投獄されたときに、自白強要のために打たれた注射のせいだ、という都市伝説があるお国柄である。レオンの異常性癖になんらかの批判的メッセージが込められているのではないか、あるいは冤罪の恐怖を訴えているのではないかなど深読みすることはいくらでもできる。しかし、おそらくこの種の試みは本作品ではそれほど意味をなさないであろう⁶。

「アンナと…」を観て、クシシュトフ・ケシロフスキ (1941-96) 監督作品との間に既視感 (デジャ・ヴュ) をおぼえる人も多いのではなかろうか。スコリモフスキ自身は、カリフォルニアで暮らしていたときに、ある日本人の若者の奇行に関する記事を読んでこの映画の着想を得たと述べているが⁷、少なくともケシロフスキの代表作を観ていないということはないだろう。「愛に関する短いフィルム」 (1988) / 「デカローグ6」 (1988) と「アンナと…」は窃視が大きなウェートを占めている点では共通している。しかも、「愛に関する…」 / 「デカローグ6」のトメクの望遠鏡と「アンナと…」のレオンの双眼鏡は、どちらも盗品である。レオンがアンナの宿舎に忍び込む第一夜、彼はアンナの服のボタンのほつれを直してやり、第二夜には床を拭き、またアンナの右足の第五趾と第四趾に赤いペディキュアを施す⁸。第三夜にはパーティ⁹のあと着替えもせず横になったアンナに毛布を掛け、指輪をはめようとする¹⁰。第四夜には壊れた鳩時計 (前日のパーティで友人がアンナにプレゼントしたもの) を直してやる。こうしたレオンの面倒見のよさ (女性性あるいは母性性) は、ケシロフスキの「トリコロール / 白の愛」 (1994) でユレクが示した思い遣り (たとえば、刑務所にいるドミニクのためにパンを焼き、カロールに持たせる) を想起させる。また、「アンナと…」で見られるブラック・アウトは「トリコロール / 青の愛」 (1993) とのつながりを思わせる。第三夜をアンナの部屋で寝過ごしたレオンはベッド下に隠れる。その時、アンナの足もとを捕らえるカメラ・アングルは、「デカローグ9」 (1988) でハンカの逢引をタンスの中から覗き見るロメクの視線に似てはいないか。裁判で不法侵入の理由を問われると、レオンは「愛していたから」と答える¹¹。「愛に関する短いフィルム」 / 「デカローグ6」のトメクもマグダに同じような表現で覗き見る理由を説明している。科白の少なさはスコリモフスキ・ケシロフスキ両監督作品に共通した特徴である。蠅や蜘蛛がクローズアップされるシーンは、「デカローグ2」 (1988) のワンカットを連想させる。

ところで、スコリモフスキの60年代最後のポーランドでの作品である「手をあげろ！」で撮影を担当した

のはヴィトルト・ソボチンスキ（1929年生）であるが、チェシロフスキが監督した生涯最後の作品「トリコロール / 赤の愛」（1994）で撮影を行ったのは、その息子のピョートル・ソボチンスキ（1958 - 2001）である。なんとというめぐり合わせであろうか。

アンナがレオンをかくも魅了したのはなぜか。アンナを演じたキング・プレイスはインタビューで同種の質問があったとき、控えめに、実のところ自分でもわからないと答えている¹²。ここで思い出されるのが、チェシロフスキ監督の「偶然」（1981）に出てくる、古参 коммуニストのヴェルネルの一風変わった異性に対する好みだ。ヴェルネルは、恋人が鼻の下と耳の周りに産毛があり、ぶくぶくとした醜い手をしていたから惹かれたと語る。プレイスを見ていると、シャロン・マグワイア監督の「ブリジット・ジョーンズの日記」で少々太目の主人公を演じるために、体重を増やし役作りしたレネー・ゼルウィガーを思い浮かべてしまう。

エンディングの壁のシーンは忘れえない。「デカログ6」の最後でトメクが「もう覗きはしてません」と言うが、「アンナと…」の場合は、女性の側からの拒絶宣言とみていいだろう（もっとも、アンナは刑務所でレオンと面会したときに、もう会わない旨を伝えている）。壁の映像は、観客がその時まで見てきたものが何だったのかと問いかける。この点はスコリモフスキ自身も認めている。「これが本当に起こったことなのか？ 主人公の病的な考えが生んだ空想に過ぎないのではないか？」¹³。「デカログ1」（1988）でも似たシーンがある。イレナがテレビの静止画像に映る甥のパヴェウを、涙を浮かべながら見るシーンが映画の最初と最後に現れ、全体がイレナの回想だったかのような印象を与えるのである。

アンナとレオンの“対話”は、作品の最も終りの方で見られる。刑務所の面会所でアンナがレオンに指輪を返す場面がそれであるが、この時彼女は彼に対し、敬称の pan ではなく、親称の ty を用いて話しかけている。ここでアンナが親称を用いたのは、レオンに対しての親しみの気持ちからではなく、蔑みからであろう。ここでは、レオンからの返答はなく、二人の会話が相互に親称レヴェルで展開したのかは知ることができない。作品全体を通じて、彼が彼女に面と向かって話しかけることは一度もないが、アンナの部屋に侵入した第三夜に、泥酔して横になっている彼女に彼が、「愛しい人よ！（Kochanie!）」と語りかけていることや、第四夜に睡眠薬入りの紅茶を飲もうとしないアンナを双眼鏡で観察し、語りかけるように「飲めよ！ 飲めよ！（Wypij! Wypij!）」と、ty に応じた命令法を用いている場面がある。したがって、レオンもまた親称を使ってアンナと会話をしたか、あるいは会話をしたかったことは確実である。

「アンナと…」はスコリモフスキ監督作品のなかで異質であることは認めなければならないだろう（「早春」の成人版と見ることも不可能ではないが）。とくにポーランドで撮られた初期作品と比較すると、一見何の共通点も見いだせないかのようだ。しかし、仔細に分析すると、“アウトサイダー”に寄せる関心という共通項があることに気づく。しかも、これらはスコリモフスキのオリジナル・シナリオによる（「アンナと…」は夫人のエヴァ・ピヤスコフスカとの共作）。ポーランド文学者の久山宏一氏はいみじくもこう述べている。「スコリモフスキは、世界を客観的に描写するのを放棄して、私的世界を創造すると成功する」¹⁴。

最後に、キャストについて少し記しておきたい。レオンを演じたアルトゥル・ステランコ¹⁵（1958年生）はそれまでに出演した映画は10本に満たず、どちらかといえば舞台俳優であった。2006年に日本で一般公開されたクシシュトフ・クラウゼ監督の「ニキフォル」（2004）に医師のアルトゥル・ローゼン役で出ている。「アンナと…」以降は、毎年のように映画に出るようになった。アンナ役のキング・プレイス（1971年生）は多くの映画に出ているが、日本公開作品ではヴォイチェフ・スマジョフスキ監督の「ダーク・ハウス / 暗い家」（2009）〔2009年第22回東京国際映画祭コンペティション部門上映作品〕やアグニエシュカ・ホラント監督の「ソハの地下水道」（2011）に出ている。院長役のイエジ・フェドロヴィチ（1947年生）は、日本公開作品ではチェシロフスキ監督の「デカログ2」（1988）に、アンジェイの友人ヤネク・ヴィエジュビツキ役で出ている。レオンの祖母の役を演じたバルバラ・コウォジェイスカ（1927年生）は日本公開作品では「デカログ3」（1988）に端役で出ている。残念ながら、2009年4月5日に逝去した。「アンナと…」の撮影を担当しているアダム・シコラ（1960年生）が、俳優としてこの作品に顔を出している。パーティに招かれた客のうち、長身で眼鏡をかけた髭を生やしていない男性である。映像では、アンナと踊る場

面も見える。

註

1. 「1936年5月5日生」としている文献もあるが、これはウッチ映画大学に保管されているスコリモフスキ自筆の履歴書に「1936年生」と記されていることを根拠としている。しかし、監督自身が語るところでは次のような事情があったようだ。「私は病弱な子どもで、ジフテリア・風疹・脳膜炎などに罹った。戦争が終わった時、私は影の様な存在だった。母は私を救おうとして、気狂いじみたことに、私の戸籍を改竄し、年齢を2つ上にしたのだ。このおかげで私はスイスに療養に行くことができた。私は回復したが、この時以来、どのグループでも最年少となった」(*Filmówka. Powieść o Łódzkiej Szkole Filmowej*, Warszawa [1992], s. 73)。このため、現在は「1938年5月5日」を出生日に挙げている文献が多い。
2. この用語の使用に否定的な映画評論家もいるが、広く受け入れられている。第一世代には戦後間もない頃に活躍したヴァンダ・ヤクボフスカやアレクサンデル・フォルトなどの映画監督が、第二世代には1920年代の生まれの、所謂「ポーランド派」(アイジェイ・ヴァイダ, イェジ・カヴァレロヴィチなど)が属す。第三世代は第二次大戦勃発前後の生まれで、1956年の「ポーランドの十月」、ゴムウカ政権の「小康状態」の政治的体験を経た映画人を指す。スコリモフスキのほか、ロマン・ポランスキ(1933年生)、クシシトフ・ザヌスイ(1939年生)などが含まれる。
3. 桐島卓「画家としても成功を収めた世界的巨匠 イェジー・スコリモフスキー氏に聞く」『映画論叢』(第17号, 2007) 11頁。「手をあげろ!」は自他共に認めるスコリモフスキの最高傑作であるが(「【特集】ディープ・エンド! スコリモフスキ!」『映画学』第10号, 1996年, 50頁)、この映画に政治色が無いということはない。ポーランドの映画評論家ヴァルデマル・ピョンテクは書いている。「『手をあげろ!』は、『大理石の男』[ヴァイダ監督, 1976]の10年前に、独創的な手法で50年代前半の問題に目を向け、その時代の大胆な分析をやったのけた映画だ」(Waldemar Piątek, „Ręce do góry”, *Filmowy serwis prasowy*, nr 16, 1981, s. 3)。ロシアの映画評論家ミロン・チェルネンコは1988年に次のように記し、最大級の賞賛を惜しまなかった。「スコリモフスキのこの映画[『手をあげろ!』]が、もし同時代にスクリーンに現れていたならば、ポーランド映画——いや、単にポーランド映画にとどまらない——を、歴史認識の比類なき高みへと(同時に深みへと)導いたことであろう」(Miron Czernienko, *Bliska zagranica. Szkice filmowe o Polakach i dla Polaków*, pod red. T. Lubelskiego, Warszawa 2007, s. 192)。ポーランドの映画評論家ボジェナ・ヤニツカもほぼ同様の見解を示している。「この映画[『手をあげろ!』]がなお[戦後]40年の映画史の中で最良作の一つに数えられることは間違いない。時がその芸術的価値に翳りをもたらすどころか、逆に輝きさえ与えた」(Bożena Janicka, „Nocna rozmowa sprzed lat”, *Film*, nr 8, 1985, s. 9)。
4. その後、「エッセンシャル・キリング」(2010)、「11分間」(2015)を撮っている。
5. 作品が醸し出す無国籍感は、監督の意図的な構成による(遠山純生編著『イェジー・スコリモフスキ』(紀伊國屋書店, 2010年, 244頁))。撮影は実際には、ポーランド北東部のシチトノとバスィムで行われた。
6. しかし、この作品にはいささか不可解な映像があるのも事実である。たとえば、人を撥ねた車、夜に雪が降ったあとでも干しっぱなしになっている白いシート(ヴァイダ監督の「灰とダイヤモンド」(1958)を想起させる)、祖母が亡くなったあともなぜか処分できなかったアコーディオン(マチェイ・デイチェル監督の「天国までの300マイル」(1990)でも、グジェシがアコーディオンをなかなか手放せなかった)——一方で、炎に包まれて祖母のオルゴールが、悲しいメロディを奏でる——などには、見落としてはならない重要なメッセージが含まれている可能性はある。特段の(政治的)メッセージはないとみるのは早計なのかもしれない。
7. 高崎俊夫「イェジー・スコリモフスキー ロングインタビュー『アンナと過ごした4日間』あるいは、むずかしい愛」『キネマ旬報』2009年1月上旬号, 74頁。

日本の映画評論家のなかには、ロベール・ブレッソン監督の「白夜」(1971)との類似性を指摘する人もいる(渡辺進也+結城秀勇=取材・構成「Interview with Jerzy Skolimowski」『nobody』第29号、51頁;高崎前掲インタビュー、74頁)。ちなみに、「白夜」の原題は「ある夢想家の四夜」(*Quatre nuits d'un réveur*)である。なお、スコリモフスキは「アンナと…」の撮影前に「白夜」は観ていなかったと語っている(「Interview with Jerzy Skolimowski」51頁)。

興味深いことに、スコリモフスキは「アンナと…」と日本との“接点”が別の意味でもあったと告白している。「シナリオを執筆している時のことですが、日本のノーベル賞作家の川端康成が『眠れる美女』を執筆しており、ある種のモチーフが驚くほど共通していることに気づきました。さらに書き進めるうちに、日本が私の想像力の中に入り込んできました。床板のかすかな軋みが緊張を生み、「砂の女」のような映画が浮かび上がってきました。私の書く主人公がたった一度だけテレビを見るとしたら、何を見erるでしょうか? 黒澤明監督の「用心棒」がすぐに閃きました」(Jacek Szczerba, *Polka podbija Amerykę jeszcze raz*, *Gazeta Wyborcza*, nr 125, 2005. Iwona Grodź, *Jerzy Skolimowski*, Warszawa 2010, s. 114, から再引用)。

8. レオンの苗字「オクラサ Okrasa」は人口約4千万のポーランドで千人に満たない、比較的レアな性である。この姓は「美化する」を意味する *okrasić* から派生したとされる(Kazimierz Rymut, *Nazwiska Polaków. Słownik historyczno-etymologiczny*, t. II, Kraków 2001, s. 176)。スコリモフスキは、レオンがアンナにペディキュアをしたことに意味を持たせたのかもしれない。
9. アンナの部屋で催されたパーティは何か。ポーランドでは「名前の日(imieniny)」(自分の名と同じ聖人の日を祝う)と誕生日とでは、前者を盛大に祝うことがふつうである。しかし、アンナの「名前の日」は7月26日であることから、冬が舞台のこの作品では説明がつかない。おそらく、アンナは誕生日祝いを行っているであろう。
10. ポーランドでは結婚指輪は右手薬指にするのが習慣である。レオンは退職金を叩いて買った指輪をアンナの右手薬指にはめるのだが、緩すぎたらしく、右手中指にはめかえようとする。
11. 人を愛すると、相手の行動に似せたくなるものなのかもしれない。レオンは自分の飲む紅茶に砂糖を2杯入れたところで動作を止めるが、考え直して3杯目を入れる(アンナの部屋に侵入した第一夜のあと)。アンナがいつも紅茶に匙3杯の砂糖を入れて飲むことを思い出したのであろう。この時、レオンはほくそ笑んでいる。
12. „Dwoje poranionych. Z Kingą Preis rozmawia Magdalena Lebecka”, *Kino*, nr 6, 2008, s. 19.
13. Iwona Grodź, „Przez zapatrzenie”, *tamże*, nr 11, 2008, s. 64.
14. 久山宏一「スコリモフスキ——映画への帰還・ポーランドへの帰還」『キネマ旬報』2009年10月下旬号、69頁。
15. スコリモフスキが語るところでは、レオンの挙動不審な動きは、ステランコの演技というより、素に近いものらしい。ただし、よたよたと歩く様を強調するため、靴に鉛を入れていたとのこと(遠山、前掲書、240-241頁)。

.....

〔作品断章〕 (1:23:19 ~ 1:26:45)

Sekretarka : Proszę siadać.

Sędzia : Otwieram rozprawę w sprawie 6K 904 / 07¹. Przeprowadzono wszystkie dowody wnioskowane przez strony. Czy strony mają inne wnioski dowodowe? Obrona?

Obronca : Nie, dziękuję.

Sędzia : Prokuratorze?

Prokurator : Nie mam wniosków.

Sędzia : Czy oskarżony podjął decyzję? Czy będzie wyjaśniać?

Okrasa : Tak.

Sędzia : Jaka jest ta decyzja?

Okrasa : Tak.

Sędzia : Czyli oskarżony będzie wyjaśniać?

Okrasa : Tak.

Sędzia : W przesłuchaniu prokuratorskim oskarżony oświadczył, że wielokrotnie włamywał się do pokoju Anny P.² w hotelu pracowniczym na terenie miejscowego szpitala. Czy oskarżony to potwierdza?

Okrasa : Tak.

Sędzia : Oskarżony oświadczył, że spędził w tym pokoju cztery noce, podczas których poszkodowana przebywała również w tym samym pokoju. Czy oskarżony to potwierdza?

Okrasa : Tak.

Sędzia : Czy w czasie którejkolwiek z tych wizyt jakkolwiek częścią ciała oskarżony naruszył nietykalność cielesną poszkodowanej³ ?

Okrasa : Nie.

Sędzia : Czy w czasie którejkolwiek z tych wizyt oskarżony ukradł lub przywłaszczył sobie jakikolwiek przedmiot należący do poszkodowanej?

Okrasa : Nie.

Sędzia : W toku przesłuchania oskarżony oświadczył, że wyniósł z pokoju poszkodowanej zegar z kukułką. Czy oskarżony to potwierdza?

Okrasa : Tak.

Sędzia : Dobrze. W jakim celu oskarżony zabrał z pokoju poszkodowanej rzeczony⁴ zegar?

Okrasa : Naprawić⁵...

Sędzia : Czy oskarżony przyznaje, że w roku 2003⁶ został skazany i odbył karę pozbawienia wolności⁷ za naruszenie nietykalności cielesnej tej samej Anny P., poszkodowanej w sprawie obecnie rozpatrywanej przed sądem?

Okrasa : Tak.

Sędzia : Zarówno wówczas w toku przesłuchań, jak również w bieżącym dochodzeniu prokuratorskim, oskarżony wielokrotnie zaprzeczał udziału w napaści i gwałcie poszkodowanej. Czy oskarżony podtrzymuje swoje zeznania?

Okrasa : Czy...?

Sędzia : Czy w 2003 oskarżony brał udział w napaści i gwałcie na Annie P. ?

Okrasa : Nie.

Sędzia : A zatem w jakim celu oskarżony włamywał się do pokoju poszkodowanej? W jakim celu czterokrotnie oskarżony włamywał się do pokoju poszkodowanej?

Okrasa : Z... z miłości.

Sędzia : Proszę głośniej.

Okrasa : Z miłości.

〔語句〕

1. sześć K dziewięćset cztery łamane przez zero siedem 2. ポーランドではファーストネームの選択幅が狭いのに対し (つまり、同名の人が非常に多い)、苗字の数は膨大である。そこで、犯罪者や被害者を表す時、しばしば苗字だけをイニシャルで表す方法が用いられる。3. naruszył nietykalność cielesną poszkodowanej 直訳すると、「被害女性の肉体的不可侵を侵す」となるが、意識する必要がある。〔訳〕を参照のこと。レ

オンは忍び込んだ2日目の夜に、アンナにペディキュアを施す際、左足に触れている。また、その次の夜には、彼女に指輪をはめようとするが、その際にも手や指に触れている。したがって、レオンが虚偽の発言をしたとみることもできる。4. rzecz の被動形動詞 5. = Aby go naprawić 6. dwa tysiące trzecim 7. kara pozbawienia wolności 禁固刑

〔訳〕

書記官：着席してください。

裁判官：6K 904 / 07号事件の審理を始めます。検察・被告人双方から出された証拠調べを終えました。双方に追加の申し立てはありますか？ 被告人側は？

弁護人：いいえ、ありません。

裁判官：検察側は？

検察官：ありません。

裁判官：被告人は決めましたか？ 証言をしますか？

オクラサ：はい。

裁判官：では、どうしますか？

オクラサ：はい。

裁判官：つまり、証言をするということですか？

オクラサ：はい。

裁判官：検察での取り調べで、被告人は、現地の病院の敷地内にある看護師寮にあるアンナ・Pの部屋にたびたび忍び込んだと供述しています。被告人はこのことを認めますか？

オクラサ：はい。

裁判官：被告人は、被害者がいるその部屋で4夜を過ごしたと供述しました。被告人はそのことを認めますか？

オクラサ：はい。

裁判官：忍び込んだ際、被告人は被害者の身体の一部でも触れたことがありましたか？

オクラサ：ありません。

裁判官：忍び込んだ際、被告人は被害者の何らかの所有物を盗む、ないし私物化したことはありますか？

オクラサ：ありません。

裁判官：検察での取り調べで、被告人は、被害者の部屋から鳩時計を持ち出したと供述しています。被告人はこのことを認めますか？

オクラサ：はい。

裁判官：わかりました。どういう目的で、被害者の部屋から前述の時計を持ち去ったのですか？

オクラサ：修理しようと思って…

裁判官：被告人は、2003年に有罪判決を受け、禁固刑に処されています。本法廷で現在審理中の事件の被害者である同じアンナ・Pに対し猥褻行為を働いたかどによるものですが、そのことは認めますか？

オクラサ：はい。

裁判官：取り調べの時も、今回の刑事裁判でも、被告人は被害者に対する強姦を否認しています。被告人は自らの供述どおりだと主張しますか？

オクラサ：主張…ですか？

裁判官：2003年に被告人はアンナ・Pを強姦しましたか？

オクラサ：いいえ。

裁判官：では、何の目的で被告人は被害者の部屋に侵入したのですか？ …… 何の目的で被告人は4度も被害者の部屋に侵入したのですか？

オクラサ：あい…愛していたからです。

ポーランド語学習教材としてのポーランド映画 (1) —イェジ・スコリモフスキ監督「アンナと過ごした4日間」を例に—

裁判官：もっと大きな声で言ってください。

オクラサ：愛していたからです。

Polish Films as Polish Teaching Materials (1)
— *Four Nights with Anna*, directed by Jerzy Skolimowski —

Katsuyoshi WATANABE

The author emphasizes that Polish films can be used as one of the best Polish teaching materials for advanced learners. In this paper, *Four Nights with Anna*, directed by Jerzy Skolimowski, is used.